

群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編(2012年改訂版)

今回評価対象とした種数とその内訳、前回評価との対比

分類群毎の状況

哺乳類		今回の評価(2012年)								計
		絶滅	野生絶滅	絶滅危惧I類		絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
				IA類	IB類					
前回の評価 (2002年)	絶滅									
	絶滅危惧I類									
	絶滅危惧II類					1				1
	準絶滅危惧			1	1			7	2	10
	注目			2	2			2	9	14
	地域個体群									
	掲載なし							2		2
計				3	3	1	9	13	1	27

前回は絶滅危惧II類1種、準絶滅危惧10種、注目14種の計25種が掲載されたが、今回は26種となり1種増加した。前回準絶滅危惧と評価された1種と、注目と評価された2種は今回絶滅危惧IA類と評価し、前回注目とされた2種を今回準絶滅危惧とした。いずれも前回より絶滅のおそれは高まっている。また、前回準絶滅危惧とされた2種を今回情報不足としたが、これは前回の評価以降に行われた調査で、生息密度は低いものの新たな生息地が確認されたためである。しかし、これは良好な生息地や個体数の増加が確認されたものではないことに留意する必要がある。前回注目とされた14種のうち9種については、絶滅のおそれはないと判断するに足る情報が不十分であることから今回は情報不足とし、1種については分類上の取り扱いの変更により評価対象外として今回掲載なしとした。全体として絶滅危惧(I類とII類)、準絶滅危惧の種が増えており、絶滅の危機に瀕する危険性が高まっていることがうかがえる。

鳥類		今回の評価(2012年)								計
		絶滅	野生絶滅	絶滅危惧I類		絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
				IA類	IB類					
前回の評価 (2002年)	絶滅									
	絶滅危惧I類			8	3	5				8
	絶滅危惧II類			4		4	4	1		9
	準絶滅危惧			1		1	1	6		8
	注目			2		2		3	31	36
	地域個体群									
	掲載なし							4	21	25
計				15	3	12	5	14	52	86

前回絶滅危惧I類と評価された8種は、今回も同程度の評価(IA類・IB類)で、絶滅の危険性は相変わらず高いままである。絶滅危惧IB類には、前回絶滅危惧II類、準絶滅危惧、注目と評価された7種が加わり、絶滅の危険性が高まっていると評価された種が増加した。また、前回は掲載されなかった25種が新たに加わり、絶滅が危惧される種が増加した。これに対し、前回よりも絶滅の危険性が低くなったと評価されたのはサンショウクイ1種だけである。

爬虫類		今回の評価(2012年)								計
		絶滅	野生絶滅	絶滅危惧I類		絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
				IA類	IB類					
前回の評価 (2002年)	絶滅									
	絶滅危惧I類									
	絶滅危惧II類					1				1
	準絶滅危惧					1	3			4
	注目									
	地域個体群									
	掲載なし							1		1
計						2	3	1		6

前回ニホンイシガメとクサガメの2種が準絶滅危惧に評価されたが、その後の調査でニホンイシガメの生息数が少ないと判断されたため、今回ニホンイシガメの評価は絶滅危惧II類となった。また、ニホンスッポンは前回の時点では県内に生息しているかどうか不明であったため評価対象外として掲載しなかったが、その後の調査で県内に生息していることが確認された。しかし、生息情報は極めて少なく今回情報不足と評価した。

群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編(2012年改訂版)

今回評価対象とした種数とその内訳、前回評価との対比

分類群毎の状況

両生類		今回の評価(2012年)								計
		絶滅	野生絶滅	絶滅危惧I類		絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
				IA類	IB類					
前回の評価 (2002年)	絶滅									
	絶滅危惧I類			1	1		1			2
	絶滅危惧II類					3				3
	準絶滅危惧						2			2
	注目					1		2	2	5
	地域個体群									
	掲載なし									
計				1	1	5	2	2	2	12

前回ヒダサンショウウオとトウキョウダルマガエルの2種が絶滅危惧I類に評価されたが、その後の調査でトウキョウダルマガエルは生息環境の改善とそれに伴って個体数の増加傾向が確認されたため、今回トウキョウダルマガエルの評価は絶滅危惧II類となった。一方、前回注目とされた5種のうち1種(ツチガエル)は、生息地の観光地化や水田の管理放棄等で生息環境が悪化したため、今回絶滅危惧II類とされた。前回絶滅危惧II類とされた3種と準絶滅危惧とされた2種は、前回と同程度の評価となった。生息環境や生息数など状況が改善した種も3種あるが、悪化が1種、同程度が8種あり、依然として厳しい状況が続いている。

魚類		今回の評価(2012年)								計
		絶滅	野生絶滅	絶滅危惧I類		絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
				IA類	IB類					
前回の評価 (2002年)	絶滅	4						1		5
	絶滅危惧I類	2		4	3	1		1		8
	絶滅危惧II類					2			1	3
	準絶滅危惧						2	1		3
	注目					1	2		4	7
	地域個体群						2			2
	掲載なし	1					1	1		3
計		7		4	3	1	5	6	4	31

前回絶滅危惧I類と評価したタナゴとアカヒレタビラは、最後に記録されてから30年以上経過しているがその後の生息情報はなく、今回は絶滅と評価した。今回新たに掲載したのはムサシトミヨ、ウナギ、カワアナゴの3種で、なかでもムサシトミヨは今回の調査で標本が発見され、かつては県内に生息していたことが確認されたが、最後に生息が確認されてから70年以上経過しており絶滅と評価した。なお、前回ヤマメとサクラマスは生活史が異なるためそれぞれ評価(地域個体群、注目)したが、今回は同一の種として扱った(準絶滅危惧、掲載なし)。

昆虫類		今回の評価(2012年)								計
		絶滅	野生絶滅	絶滅危惧I類		絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
				IA類	IB類					
前回の評価 (2002年)	絶滅	1			4			2	5	12
	絶滅危惧I類				25	13	12	17	14	81
	絶滅危惧II類				5	18	27	6	20	76
	準絶滅危惧					3	27	19	33	82
	注目					2	1	18	30	51
	地域個体群						1		2	3
	掲載なし				4	17	15	63		99
計		1			38	53	83	125	104	404

前回掲載されていた305種のうち、その後行われた調査結果から絶滅のおそれがないと判断されたり、記録の精度に問題があり標本も確認できなかった104種を評価対象外とした。また、前は掲載されていなかった99種が新たに加わり、今回は計300種が掲載された。全体的には、前回より今回の評価の方が絶滅の危険性が低いとみられる評価となっているが、これは前回とは異なる評価基準を用いているため単純には比較できず、昆虫類の生息環境が改善したり生息地や個体数が増加したということではなく、厳しい状況におかれていることに変わりはない。

群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編(2012年改訂版)

今回評価対象とした種数とその内訳、前回評価との対比

分類群毎の状況

クモ類	今回の評価(2012年)							計
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧I類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
前回の評価 (2002年)	絶滅							
	絶滅危惧I類					1	6	7
	絶滅危惧II類					2		4
	準絶滅危惧							5
	注目							2
	地域個体群							
	掲載なし					1		
計					4	6	11	21

今回掲載した種とその評価は、過去10年間における調査結果を踏まえて前回の掲載種を再評価した結果である。種数が減少したのは、クモ類の生息環境が改善されたという意味ではなく、今回用いた基準に沿って再評価した結果である。クモは常に同じ場所に毎年生息するとは限らないため、個体数の増減判定や生息場所の特定が困難である。また、自身の生ずる糸を利用して空を飛び、移動能力があり(一部は移動力の弱い種もあるが)、個体数の少ない種であれば生息地の特定も困難である。今回掲載なしとされた種は、問題がないということではない。生態系の一部として貴重な動物であることに変わりはなく、今後も調査を継続して行いデータを積み上げていく必要がある。

甲殻類	今回の評価(2012年)							計
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧I類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
前回の評価 (2002年)	絶滅							
	絶滅危惧I類							
	絶滅危惧II類					1		1
	準絶滅危惧						1	1
	注目					3		2
	地域個体群							
	掲載なし							
計					4	1	3	8

準絶滅危惧に評価されたアジアカブトエビは分布が桃ノ木川流域に限られており、スジエビ・テナガエビ・ヌカエビは外来魚による捕食圧が懸念されている。モクスガニは確認された場所や情報が少なく情報不足と評価した。また、前回準絶滅危惧と評価したサワガニ及び注目と評価したハウネンエビは、生息環境の改善により当面は絶滅のおそれはないと判断して今回は除外した。

陸・淡水産貝類	今回の評価(2012年)							計
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧I類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
前回の評価 (2002年)	絶滅	1						1
	絶滅危惧I類			18				18
	絶滅危惧II類			1	2			1
	準絶滅危惧			2	6	5	1	1
	注目			2	4	2		6
	地域個体群							
	掲載なし			1	3	3	4	
計	1		24	15	10	5	9	64

前回絶滅危惧I類に評価された18種のうち、最近10年間で生息地や個体の確認ができないものが13種ある。絶滅危惧II類から絶滅危惧I類になったのは淡水産貝類の1種で、この種も最近10年間で生息の確認ができていない。生息地が観光地の中心にあり、水質悪化や護岸工事等で生息環境の悪化が進んだ結果とみられる。準絶滅危惧から絶滅危惧I類になったのは陸産貝類の2種で、いずれも生息地の開発で乾燥化が進み、最近10年間で生息確認ができていない。注目または掲載なしから絶滅危惧I類になった3種は、県内の石灰岩採掘地に局所的に生息する種で、もともと希少種であったが採掘作業により生息環境が著しく悪化しており、絶滅のおそれがある。今回掲載なしとされた9種については、前回絶滅危惧II類に評価された淡水産貝類の1種は国内移入種のため、前回絶滅と評価されていた1種は別種であることが判明したため、他の7種は最近10年間に多くの生息が確認されたため、今回は対象外とした。全体的には前回より今回の方が評価対象種の数が増加しており、県内の生息環境は悪化していると推測される。

群馬県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編(2012年改訂版)

今回評価対象とした種数とその内訳、前回評価との対比

分類群毎の状況

ヒドロムシ類・ウズムシ類・コケムシ類		今回の評価(2012年)							計
		絶滅	野生絶滅	絶滅危惧I類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足	掲載なし	
前回の評価 (2002年)	絶滅								
	絶滅危惧I類								
	絶滅危惧II類				2			1	3
	準絶滅危惧				2	1			3
	注目							3	3
	地域個体群								
	掲載なし								
計					4	1		4	9

今回絶滅危惧II類と評価した4種のうち2種は、いずれも前回準絶滅危惧と評価したコケムシ類である。これらの種は現存する分布地が限られ、生息環境の悪化が懸念されるなど絶滅する危険性が高まっている。なお、今回は掲載されていたが今回は評価対象外として掲載していない種が4種あるが、このうちヤスデ類の2種については、絶滅のおそれがあるのか否かを判断できる記録や情報が得られなかったため評価対象外としたもので、生息環境の改善や個体数の増加により絶滅のおそれが無くなったわけではない。